

1. 故宮博物院



数ある展示物の中で今回私が見たものは、青銅器と敬天格物と呼ばれる中国歴代玉器のこの二種類である。

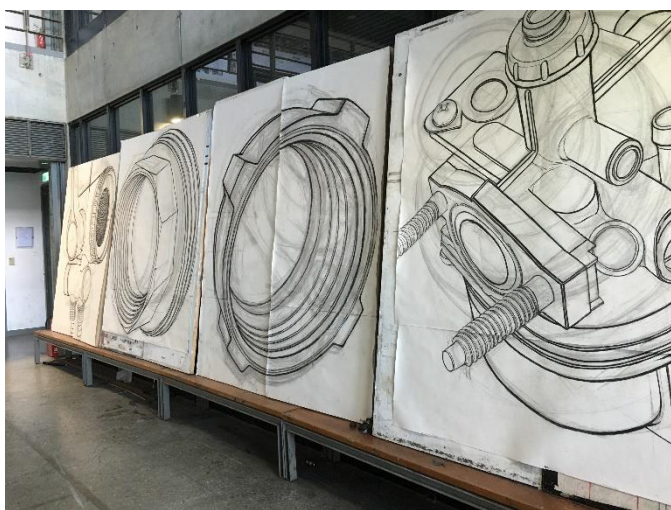
青銅器は主に、酒器、食器、水器、楽器の四種類に分類され、それはおおよそ何らかの動物や人物を象っている。たとえば、あたかも奴隷の扱いを象徴したような酒器や、ある動物が水を飲んでいるように見える水器などである。

玉器は概ねヒスイから作られており、アクセサリーとして用いられていたものが多い。一方で「王様のおもちゃ箱」、と称して小箱にまとめられ、単なる小物として扱われていたものもあった。

この博物院に展示されているものは、日本が縄文・弥生時代であった頃のものであろうと言われている。つまり、日本の青銅器や装飾品がどこか似通った部分があるとしたならば、それは近隣国から由来したものであると言えよう。

この博物院に展示されているものは、かつて中華人民共和国にいた者たちが台湾にすべて持ち込んだものであると言われている。故に、本来現中国にあったであろうとされている宝物は、この故宮博物院に収められている。

2. 実践大学



実践大学は、台北市にある私立大学である。今回、我々が訪問した学科は、服飾デザイン学科とメディアコミュニケーションデザイン学科のこの二学科だ。

実践大学の服飾デザイン学科は世界規模で注目されており、毎年、東京やニューヨークなどでファッションショーを開催している。卒業生の中には、独自のブランドを立ち上げる者も少なくないという。

また、メディアコミュニケーションデザイン学科は、北翔大学のメディアデザイン学科と似通ったものがあり、他の学科に比べて比較的自由的な傾向にある。アニメーションを1から作り上げる学生もいれば、オリジナルのシンセサイザーを開発する学生もいる。

学内の至るところには写真のような学生の作品が多く並べられており、この他にもねじを波のように打ち付けた作品や、アメリカピンを使用した絵画なども見かけた。

この大学がデザインで有名というのは伊達ではなく、それは建物の外観にもよくと見られた。例えば、日本では低いところに設置されがちな運動場は、実践大学では屋上に施されていた。そのため風の通りは良く台湾の猛暑もものともしないづくりで、辺りの街並みを見渡せるほどの高さであるから、開放的な気分で体を動かすことができるであろう。

3. タイペイ・アイ



タイペイ・アイは、中国の伝統舞台芸術をメインとして演劇活動をしている劇団である。

撮影のみ可能で、サービスが非常に充実している。

この日の演目は『無底洞』、これは西遊記の一遍である。

役者は、剣術や舞踊を舞台袖での生演奏にあわせて役を演じ、半ばミュージカル形式で物語は進行されていく。

プロセニウムアーチの上手、下手にはそれぞれプロジェクターが設置されており、演目ごとに各国の字幕が表示される仕組みだ。対応言語は、中国語、英語、日本語、韓国語の四か国語である。

私が最も印象的であったのは、開演前に出入り口付近で役者各々のメイクの様子を公開していたことだ。本来、楽屋等で行われるメイクが、客前で行われているというのは、客として非常に喜ばしいサービスである。また、その付近のコーナーでは役者との撮影や、劇中音響の生演奏などが公開されており、観劇前から劇の世界に引き込まれるようであった。

舞台袖の生演奏を軸として物語が進む中で、役者は各々の役をややミュージカル調で演じていく。中でも、ねずみの精を演じた役者は、ねずみ独特の甲高い鳴き声を具現化するため、金切り声にも似た声色で言葉を連ねるが、言葉分らずとも一言ひとことがはっきりしているのが分かった。

最も、劇中で印象に残っている演出が、役者の細かい動きだ。ねずみの使いは口に何かを

含んでいるように見せかけて口先を微動させ、孫悟空はほかの役者よりも多くせわしなくまばたきをすることによってさらしさを表現していた。

郷土芸能とあって台本の基礎は決まっはいるものの、劇中のアドリブでポケモンGOなどのタイムリーなものをユーモア要素として取り入れ、劇場を和ませていた。

日本の郷土芸能とは異なり、柔軟で型にはまらないという印象を受けた。この柔軟性を、日本の郷土芸能に限らず今後の現代演劇に活かしていけないだろうか。

4. 士林夜市

台湾の数ある夜市の中でも最も大規模な夜市が、この士林夜市である。

代表的な販売物は、小籠包などの蒸し物や、魯肉飯、牛肉麵などの肉料理である。食品に限らず小物も販売しており、価格は比較的安価だ。

屋台の数は500店以上で、17時から24時までの営業時間で回りきることはまず不可能だろう。

また、大規模な夜市であるが故に、各国からの観光客も少なくないため、店主が英語や日本語を話すことができるのは、もはや普通のことであるようだった。

私は、この士林夜市で、杏仁ミルク、フライドチキン、醤油だんごを口にした。

杏仁ミルクは杏仁豆腐をそのままドリンクにしたもので、日本のものと比べるとやややうす味で香りが強い。フライドチキンはもも肉を平たく上げたもので、日本のそれとほとんど味は変わらなかった。醤油だんごはだんごと称するより、まんじゅうと称する方が、我々にとっては適切であろう。生地の中に餡が詰められた食べ物だ。

フライドチキン、醤油だんごは脂身の目立つ食べ物であった。

5. 台北101

この建物は、台湾でも最も高いと言われる超高層ビルである。その高さは優に500メートルを越え、地上101階、地下5階からなる。台北101と呼ばれる所以はこれにある。

展望台は89階にある。そこへ通じるために施されているエレベーターは東芝のエレベーターで、時速60キロメートルの速さで上昇・降下する。地上1階から89階まで、およそ40秒ほどで到達するのだ。その移動時間中、エレベーター内はプラネタリウムのようにライトアップされて、緩やかな音楽が流れ出す。

90階ほどの吹き抜け空間には、建物の重心を担うチューンドマスダンパーと呼ばれる巨大な球体が下げられている。重量は約660トンであるという。理論上、風力による振動を4割も抑制できるのだ。

展望台からは台北市が一望できた。台湾は高い建物が少ないイメージがあったが、そんな先入観とはまったく異なり、都心部ということもあってか高い建物が多かった。

6. 松山文創園區

松山文創園區は、かつて日本人によって設立された煙草工場であった。1937年に「台湾総督府専売局松山煙草工場」として建設され、現在では、文化活動センターとなっている。

内装は、当時のものをそのまま使用しているため、戦後の日本を色濃く映し出している。

施設の一部は展示場として貸し出されており、都度展覧会が開かれていると言う。学生専用展示場もあり、アクセサリや石膏、塩で作られた置物など、多種多様な作品が展示されていた。

もともと日本国が関わっていたという史実が存在する所以か、やはり落ち着く雰囲気を感じた。

7. 食文化



台湾料理は、しばしば福建料理と呼ばれている。

日本とは異なり、主食は殆ど食されておらず、大皿料理を大人数で囲うのが主流である。8割の料理には、香り付けにニンニクが多用されている。

中華料理と聞いて蒸し物が真っ先に思い浮かぶが、実際に多いのは炒め物や煮物だ。それも専ら、乾物が多く使用されている。

研修中、烏龍茶を飲む機会が多くあったが、各所によって風味は全く異なる。

台北市に本店を置く鼎泰豊（ディンタイフォン）で本格的な小籠包を口にしたが、他の料理で感じた肉独特の臭みが一切なく、食べやすく感じた。量こそ多くはないものの、少数だからこそあのうまみを身に沁みて感じることができるのだろう。

実食して感じたことは、日本に比べて使用されている油の量が膨大であるということだ。決して健康的ではないという意味合いではなく、食材の使い方が豪快であるのだ。よって、大皿を数人で分けようにも日本の学生には量が多く感じられるだろう。

世界的に、日本食がヘルシーであると言われる所以も実感できた。

9. まとめ

今回の研修が、初めての海外渡航であった。パスポートを取得するところから始まり、オ

リエンテーションを重ねていくうち、研修への関心・意欲を高めるだけでなく、海外渡航の方法も学ぶことができた。言葉も文化も異なる土地で、いかにしてコミュニケーションを図るか。言葉だけがコミュニケーション方法ではないということも学んだ。特に、芸術に関しては、作品を通して己の意図を伝えられるのだ。

だがしかし、おおもとは言語であると考えているから、英語のみならず、他国の言語も授業を通して学びたいという意欲が湧いた。

また、無形のものばかりではなく、日本では見られない植物の生態も楽しみながら学ぶことができた。亜寒帯に属する北海道では見ることのできない、亜熱帯ならではの高い植物を見ることができた。

研修を通して自分は大きく得るものがあった。此度の研修で留まらず、他の国への渡航も考えている。